

わたしと古民家と毎日
～古民家ベーカリー&カフェとまり木～

衿乃光希 Mitsuki Erino



アルファポリス文庫

一章 田舎とパン屋とグルメバーガー

1. かぶりつく女

思わず湧き上がる唾を、私はゴクリと飲み込んだ。

目の前でひときわ存在感を放つ食べ物を見つめる。

真っ白な円形の皿に直に載った、手のひらほどの大きさ――

形を崩してしまわないよう、慎重に手に取る。

「ずしりと重い。さすが、千五百円のグルメバーガー。」

和牛百パーセントの挽き肉のパティの上に、とろけたチェダーチーズが垂れ下がり、バンズからはみ出たベーコンと一体化している。

下のバンズとパティの間には、見るからに新鮮なトマトとレタス。

「手が汚れないように、使ってくださいね」と店員さんからもらった紙で、バーガー

の半分ほどを包み込む。

見れば見るほど、なんて豪華なハンバーガーなんだろう。

口の中で唾が溢れて止まらない。

お腹も脳も、さつきサンドイッチを食べたことなど忘れ去り、早く食わせろと指令を送ってくる。

ハンバーガーの中央に刺さった串を抜く。

「いただきます」

顎を限界まで開き、バンズの上から下まで口に含むと、ゆっくりと顎を閉じた。

香ばしく焼かれたバンズ、弾力のあるベーコン、肉々しいハンバーグ、シャキッとしたレタスとトマトをまとめて噛み切る。

「んー」

ジューシーなパティに詰まった旨味が口の中に広がり、スモーキーな香りが鼻に抜ける。ベーコンとチーズの塩味やコクが上乘せされて、背徳感を覚える。けれど、シャキッとした瑞々しいレタスとトマトがさっぱりと肉の脂を中和してくれて、食べやすくなる。

ごっくんと飲み下す。

脳が、胃が、喜んでいる！

最近は何を食べても味を感じなかった。

体を動かすだけなら、食事はなんでもいいと思っていた。

食べているという意識もなく、目の前に用意した物を機械的に口に運び、咀嚼し、水や、たまにビールで流し込んだ。

食事を楽しむ心の余裕が、まったくなかった。

それなのに……なんなのだろう、このハンバーガーは。

閉じ切っていた味覚の扉をこじ開け、食べ食えと強引に入り込んで来る。

美味しい。美味しい。もっと食べたい。

もっと、もっと。

湧き上がってくる衝動のままに、私はベーコンレタスチーズバーガーにかぶりついた。

2. 古民家ベーカリー&カフェとまり木

私、鈴原依織がグルメバーガーにかぶりついているお店は、山間の住宅街にある

『古民家ベーカリー&カフェとまり木』というパン屋さんだった。

古民家をリフォームした店内には、パン屋とカフェが併設されていて、購入済みのパンをカフェで食べることもできるし、カフェ限定で注文できるメニューもあった。

私がおこなうに行き着いたのは、たまたま。知っている土地でもなく、目当てにして来たわけでもなかった。

——昨日体調不良で一晩入院し、退院後出社するため、昼頃電車に乗った。会社の最寄り駅に着いた時、私の足は動かなかった。降りようと思う意識も働かなかった。電車を降りることができなくて、ずっと乗り続けてしまった。

ほんやりと車窓を眺め、各駅停車で三時間。時刻は十五時を過ぎている。

とある駅でなんとなく降りてみようと思ひ、立ち上がった。

下車して駅に降り立ってみると、空気が澄んでいて、気温も少し低めに感じた。都会の喧騒と九月半ばの残暑が、この場所にはない。陽射しはあるけれど、からっとしている。

気持ちいいから少し歩いてみよう。

土地鑑はないけれど、冒險してみた気になった。

改札を出ると、自販機が目にとまった。いつもの癖で水を買おうとして、お医者さんの言葉を思い出してスポーツドリンクに替えた。

周囲を見渡しながら歩く。

山々に囲まれ、平地には畑が広がる、長閑なところだった。畑の間に立ち並ぶ住宅は古民家というのだろう、どれも築年数が経っているように見える。

重厚感のある瓦屋根の和風建築で、広い敷地を立派な白壁が囲っている。

私が生まれる以前から、受け継がれてきたのだろう。

観察しながらあてもなく歩いていると、一軒のパン屋さんが目に留まった。

そういえば朝、病院で食事をして以来、さつき駅前の自販機で買ったスポーツドリンクしか口にしていなかったなと気がついた。

倒れるとまた他人様に迷惑をかけてしまう。

何か食べておこうと思ひ、私はパン屋さんに向かった。

この建物も古民家だった。二階建ての一軒家。

敷地を囲う塀はリフォームされていて、木製でおしゃれだった。

看板がついていて、白文字で『古民家ベーカリー&カフェとまり木』と書いてある。クロワッサンとコーヒーカーップの絵も描かれていた。

庭が飲食可能エリアになっていて、茶色の柴犬を連れた六十代くらいの夫婦が一組縁側に座っていた。クリアコップに入ったアイスコーヒーを飲みながら、パンを食べている。

庭の横の道を通って、紺色の暖簾のれんが掛かった引き戸をからからと開けると、パンの香ばしい匂いが鼻に飛び込んで来た。

「いい匂い」

思わず独り言が漏れてしまうくらい、美味しそうな香りだった。

築年数の経った外観と打って変わって、内装は洋風にリフォームされている。パンが並んだ棚が壁際に置かれ、左手側にはカフェ、右手側の壁の窓からはキッチンが見えた。

トングとトレイを手に取って、パンを見ていく。

体に良さそうなパンってどれだろう。

パン屋さんに足を運ぶのなんて、何ヶ月ぶりかな。

去年から就職を機に一人暮らしを始めた。自炊するつもりだったのに、仕事を覚えるのに必死で余裕がなく、コンビニや、夜遅くまで営業しているスーパーでお弁当やお惣菜やパンを買う日々。

休日も出歩く時間はなく、勉強に追われた。

ゆっくり味わう時間も気持ちの余裕もなくて、胃に流し込むような食事をしていて、体を維持するためだけに食べていた。

そんな生活のせいなのか、夏に入った頃から味を感じなくなっていた。空腹感も。

つい忘れてしまいそうになる食事を続けられていたのは、ただの習慣。
だから昨日倒れてしまったのだ。

棚には甘そうなパンからハード系、総菜系など、かなりの種類が並んでいる。

硬いハード系のパンを咀嚼するのは面倒だし、選択するのに頭を使うのも気が進まなくて、手軽な物でいいか、と冷蔵庫に入っているサンドイッチを手を取った。柔らかそうな食パンに挟まっているレタスが新鮮そうに見えたから。味を感じなくなっただけから、食感だけが食べているという実感をくれていた。

レジにトレイを置くと、トレイの下が光ったあと、何を買ったのか液晶画面に出て来た。初めて見るシステムに、ちょっとびっくりする。

「こういう仕組みになっているんだろ。」

イトインを選ぶと、飲み物の選択肢が画面に表示される。

選ぶことばかりしないといけないのは、疲れる。水でいいんだけど、と思った直後、強烈なビタミカラーなましほに目を奪われた。

注文したのは、生搾りオレンジジュースだった。

スマホで決済をしていると、カフェスペースから店員さんらしき女性が「いらっしゃいませ」と言いながら小走りやって来る。

反対側から画面を見た店員さんは、
「店内でご飲食ですね。お飲み物はのちほどお届けいたしますね。お好きな席へどうぞ」

とにっこり微笑んだ。

三十代前半くらいだろうか、同性の私から見ても惹かれるほどきれいな人だった。お好きな席へ、と言われたので店内を見渡す。

木曜日の十六時前、店内はそこその混み具合だった。

白い帽子を被った別の店員さんが、「失礼します」と私の横をすり抜けて、料理を運んで行った。

すごいボリュームのハンバーガーと、山盛りのポテトが載ったお皿を見て、ぎょっとした。あんなすごい量を食べられるの？

四十代くらいの夫婦らしき二人は、運ばれて来たハンバーガーに「すごい」「旨そうだな」と興奮するような声を上げている。

庭を見ながら休憩しなかったけど、残念ながら窓側のソファ席には空きがない。

また考えるのが面倒になったから、誰もいないカウンター席を選んだ。

「お待たせしました。生搾りオレンジジュースです。ごゆっくりどうぞ」
ことり、とクリアコップが置かれた。画面で見たとおりの鮮やかなオレンジ色の水

面が氷とともに揺れている。

「ありがとうございます」

店員さんの対応は気さくで、友達の親みたいな親しみやすい雰囲気。古民家の空気に合っている。

なんか、いいな、ここ。

心地いい空間に、溜め息とは違う吐息がふっと零れる。

生搾りオレンジジュースのストローに口をつけ、吸い込む。

「美味しい……」

オレンジのさっぱりした香りと甘味と酸味に、はっとした。

味がした。香りもあった。

もう一口飲む。

この数ヶ月、何を食べても無味無臭で、食事をしている感がまったくなかったのに。ちゃんと味を感じられた。

久しぶりに果物を食べたからだろうか。

果物は面倒でほとんど食べない。ジュースも口の中がべたべたするから苦手。水ばかり飲んでるのは、後味が気になるから。

けれど、このオレンジジュースは後味もすっきりしていて爽やか。

生搾りのお陰だろうか。あまりに美味しすぎて、一気飲みしてしまいそう。でももったいない。また注文すればいいんだけど、そうじゃない。大切にしたい一杯に思えた。

ああ、でもオレンジって味が濃いのかもかもしれない。あっさりしたサンドイッチは、きつと何も感じないんだろうな。

諦めに似た心境で、封を開けた。

サンドイッチの具材の一つは卵。もう一つは、ハムとレタスとキュウリ。見た目もコンビニに売っている普通の物とあまり変わらない。違いは具が少し多めなぐらい。

期待するほうが難しい。それくらい普通のサンドイッチに見えた。

ハムが入っている方を先に食べる。

あれ？ 味がする。

シャキシヤキのレタスとキュウリ、塩味を感じるハム。パンに塗ってあるのはバターじゃなくてマヨネーズ。マスタードが混ざっているのか、かすかにぴりりとした辛味を感じる。

その具材とうまく調和しているのが、パンだった。

もっちりしっとりして柔らかく、噛めば噛むほど小麦の風味を感じる。

見た目は素朴なのに、こんなに繊細な味がするサンドイッチは初めて食べた。

美味しい。

一口一口丁寧に味わう。

食べ終わると、もう一つに目が行った。

卵だ。

さっきまでなかった期待がむくむくと膨らむ。

卵は味が濃い。いったいどんな衝撃を感じられるのかと考えると、ドキドキ胸が高鳴った。

3. ここで働きたい

卵のサンドイッチは、茹で卵を潰し、マヨネーズで和えたベーシックなもの。

コンビニでもたまに買って食べていたけど、卵すらも味を感じなくなっていて、がっかりしていた。

シンプルなハムとレタスとキュウリが美味しかったんだから、卵はもっと美味しいはず。

一口噛み切り、咀嚼する。

「美味しい」

思わず唸り声が出てしまう。お店だったから声を抑えたけど、家だったら叫んでいたかもしれない。

パンはもちろんのこと、卵は滑らかで柔らかい。だけど、ちゃんと食感がある。

味は濃厚で、少し甘め。塩つけも感じられて、深みとコクがある。

卵だ。卵の味がするよお。美味しいよお。

ぐずつと鼻が鳴った。食べ物の味を感じる、美味しいと思えることが、とてつもなく嬉しかった。

喜びは、涙となって表れた。

頬に雫を感じる。だけど、食べる手を止められなかった。

ががつとはいかない。一口一口丁寧ていねいに、ゆっくりしつかりと味わう。

涙はとめどなく溢れてくるけれど、拭うよりも、今は食事に集中したかった。

壁を向いて座っているから、店内にいる人には見られていないだろう。カウンター席で良かった。

「ご馳走様でした」

とても美味しいサンドイッチだった。

ジャケットのポケットからハンカチを取り出し、頬を拭く。

その間に、他の物も食べてみたい衝動が湧き上がってきた。美味しいという喜びを、戻って来た味覚を、もっと楽しみたいになっていた。

カフェのメニューを手取る。

料理の写真と手書きのチラシをパウチしたお手製のメニューには、グルメバーガーの他に、ホットサンド、注文後にクリームを入れてくれるというコロネもあった。

パン自体が小麦を感じられて美味しかったから、トーストされたパンを食べたい。そんな気持ちがあったけれど、食パンを買って帰れば、自宅でも楽しむことができる。

どうせなら、お店でしか食べられない物を味わいたい。

さっき店員さんが運んでいたハンバーガーが、頭から離れなかった。

食べ切れるかな、という心配もあった。もともと食が細い上に、ずっと食欲が落ちていたため、胃がもつと小さくなっているだろう。サンドイッチを食べたあとに、山盛りポテトと肉厚のハンバーガーを完食できるのか。

うーん、とお腹の具合と相談する。結果、食べたい気持ちが勝った。

グルメバーガーは六種類。

ブレーンはハンバーグとレタスとトマト。

他にチーズやベーコン、目玉焼き、アボカドなどの具材を組み合わせることがきる。

すべての具材がプラスされた、スペシャル全部盛りは単品で二千円を超えていた。私にとってハンバーガーは、手軽に食べられるファストフード。高くても七百円から八百円のライン。

プレンでさえ単品千二百円という強気な価格設定に驚いた。でも、値段の意味について考える。和牛を百パーセント使っていて、これだけのお金を出せば、価格に見合った美味しい体験ができるんじゃないかな。

想像するだけで、唾が溢れる。

さっき注文していた夫婦は、食べ終えたのだろうか。

外を見るフリをして、振り向いた。

なんて満足そうな顔！

満ち足りた笑顔で、包み紙を折り畳んでいる。二人は「美味しかったあ。満腹う」と語尾に音符かハートがついていそうな雰囲気話している。

もう一度メニューを見直して、私は店員さんと呼んだ。白い帽子を被った店員さんが来てくれた。

「ベーコンレタスチーズバーガーの単品をください」

「セットだとサラダかドリンク、ポテトかオニオンリングを選べたけれど、サンドイッチを食べたあとだから、お腹に入りそうになかった。

「単品ですね」

オーダーを確認した店員さんが、しばらくしてからハンバーガーを持って来てくれた。

「おおおー」

と思わず感嘆の声が漏れた。

まずそのポリウムに驚く。串が刺さっていないと持って来る途中で倒れちゃうよね、と思うほど具材が積み上がっていて、圧倒される。

運ばれて行くのを見たけれど、自分が注文をした物として目の前に置かれると、凄まじい物を頼んじゃった感満載だ。

食の細い私が今からこれを食べるんだと思うと、なぜだか笑いたくなくなった。

いざ持ち上げると、ずっしりと重い。

口に近づけると、燻製されたベーコンの芳醇ほろじょんな香りが最初に届いた。

「いただきます」

想像以上に刺激を受けた味覚と食欲は、サンドイッチを食べた時とは逆に、ガツガツとハンバーガーにかぶりつかせた。

「ご馳走様でした」

無我夢中でグルメバーガーを堪能した私は、包み紙を折り畳んでから手を合わせた。値段に見合う、納得の体験をした。

普段食べる量より多すぎて、お腹がはち切れそうだった。

味覚は完全に戻っていると確信した。

「あ、写真撮れば良かったかな」

食べ終わってから、写真を撮るのを忘れたことに気がついた。

食の細い私がボリューミーなグルメバーガーを平らげた、なんて友達が知ったらびっくりするだろうな。

写真のために二個目を頼むのは無理。入らない。

少し残念だけど、また来ればいいか。他のグルメバーガーも試したいし。

残っていたオレンジジュースを飲み干して、席を立った。

店内で頼んだ分の会計のため、レシートのパーカーコードをレジで読み込ませようとしたところで、一枚の貼り紙が目についた。

「え？ スタッフ募集？」

さっきはレジのシステムに驚いたから気づかなかった。

とりあえず会計を済ませてから、手書きの貼り紙をよく見る。

「急募長期アルバイト レジ・ホール・調理補助スタッフ」とあり、時給と勤務時間、定休日は火水、まかない付きと書いてある。

時給は高くない。だけど、時給以上のものに惹かれていて。

このお店の食べ物、失くした味覚を取り戻し、味わったことのない感動を体験させてくれた。食べながら泣くという初めての体験を。

ここで働きたい。まかないを食べられるのなら、無給でもいいぐらい。

お店の雰囲気はすごく良いし、感じの良い二人の女性スタッフもいる。

レジの奥にはキッチンがあって、紺色のキャップ帽を被ったふくよかなおじさんが調理をしている。鼻歌が聴こえてきそうなくらい楽しそうだった。

上機嫌で仕事をする人を、初めて見た。

私の職場はみんなぴりぴりしていて、常に営業電話をかける声^あがしている。ノルマに追われ、契約を取ろうと毎月毎月必死だった。課長は不機嫌を露^あわにしてスタッフを叱り飛ばす。終業後でも和やかな雰囲気は感じられない。みんな顔色が悪かった。

それが仕事なのだと思っていた。周囲がそうだから。保険外交員の仕事に楽しさや充実感などを覚えたことは、一切なかった。

あの職場に戻って働ける？

無理だ。自信がない。

あの職場に戻ることを考えるだけで、胃が痛くなりそうだ。ここでなら、私は楽しく働けるかもしれない。充実感や満足感を、仕事で得られるかもしれない。

私、ここで働きたい。

強い願いがこみ上げて来て、白い帽子の店員さんに声をかけた。

「私、ここで働きたいです！」

4. 面接

私に声をかけられた店員さんは、びっくりしたのか一瞬目を見開いたあと、

「少しお待ちくださいね」

と言い置いて、キッチンに入った。

調理中のふくよかなおじさんに話しかけている。

こつちを向いたおじさんに会釈され、つられて頭を下げた。

何歳ぐらいの方だろう？ 五十代？ 私のお母さんより年上みたい。

少し待っていると、話を終えた店員さんが戻って来た。

「閉店後に面接をしたので、待っていてもらっても大丈夫ですか？ あと一時間ちょっとありますけど」

「はい！ 大丈夫です。待たせていただきます。あの、近くにコンビニはありますか？ 履歴書を持っていなくて、買って来たいのですが」

勢いで働きたいと申し出たものの、履歴書を持ち合わせていなかった。

「コンビニは近くにないですね」

あっさり「ない」と言われてしまった。

キッチンのおじさんへと確認しに戻った店員さんは、

「今日に必要なとのことですよ。口頭でお聞きしますよ」

「わかりました。すみません」

忙しいのに何度も訊きに行かせてしまっして申し訳ないと、頭を下げる。

店員さんは「気にしないで」と笑顔で言っって仕事に戻った。

私は壁際に寄り、店内を観察する。

今の時刻は十七時前。夕食には少し早い時間だけど、グルメバーガーを食べている人がちらほら。

みんな期待いっぱい顔でかぶりつき、満足感溢れる表情で食べ進めている。

私もあんな顔で食べていたんだろうな、美味しかったもん。

美味しそうに頬張っているお客さんたちに、少し前の自分の姿を重ね合わせた。

「これ使って」

最初にレジをしてくれたきれいな店員さんが、イスを持って来てくれた。

「あ、すみません。ありがとうございます」

お客さん用の物と違い、座布団がついていて背もたれがない。スタッフ用のイスかな、と思いつつ腰を掛けた。

スマホを取り出し、この場所を調べる。

このお店で働きたいと言ったものの、地理がまったくわからない。

今の家から通えるのか通勤経路を確かめる——遠い。

特急が快速一本でお店の最寄り駅まで来られたら良かったんだけど、途中で普通電車に乗り換えなといけない。交通費も高い。引越しを検討した方がいいのかも。

近辺の賃貸情報を検索してみるが、ない。

とまり木の最寄り駅には賃貸物件がなかった。範囲を広げて探してみると、隣の駅に数軒見つかった。

今より家賃は下がるけれど、正社員ではなくなるから収入も減る。

フルタイムで、火水の定休日以外すべて入れてもらえれば、なんとかやっつけていける

かな。

あ、でも税金や健康保険、年金などを支払わないといけないことを考えると、少し厳しいかもしれない。

そもそも、どれだけの間働かせてもらえるのか、まだわからない。お店の事情もあるだろうし。

お金を稼ぐって大変だ。働きたい気持ちはあるけれど、お給料によっては無理かもしれないと少し弱気になっていると、

「お待たせしましたね」

と声をかけられた。

はっとしてスマホから顔を上げる。キッチンで調理をしていたあのふくよかなおじさんが、近くに立っていた。

「いえ、急にすみません」

慌てて立ち上がる。調べものをしていたら、あつという間に一時間経っていた。

「ゆっくりで大丈夫ですよ。こっちで話しましょうか」

テーブル席に案内されて、向かい合わせに座った。

庭に面した窓には、さっきまでなかったカーテンが掛かっていた。閉店時間を迎え、二人の女性店員さんが片付けをしている。

「うちのパンを食べてくれたんですよね。どうでした？ お口に合いましたか？」
 「はい！ とても美味しくくて、すごく満たされました。繊細で奥が深くて、感動しました」

「褒められすぎて、困っちゃいますね」

おじさんは照れたのか、はにかんだ笑みを浮かべる。

「僕は笹井始はじめといいます。とまり木のオーナーシェフです」

おじさんこと笹井さんは、目じりを下げ、感じの良い柔らかい笑みを浮かべる。

「鈴原依織よゐといいます。二十四歳で、昨年大学を卒業して、今は○△保険に勤めています」

「大手じゃないですか」

「運が良かっただけです。実力も才能もなく、課長から怒られてばかりで」

会社としては大手だけれど、戦力にならなかった私には、ただただ重い看板だった。「保険会社を退職して、うちで働きたいということですか」

「はい」

「それは飲食に興味があるから、転職をしたいということ？」

「飲食業界に興味があるからというよりは、ここの味に惚まれたというか、治してもらったっていうのが、正確なんですけど」

「治した？ どこか体の調子でも良くなかったのですか」

心配そうな顔をしてくれるオーナーシェフに、夏に入った頃から味覚がなくなっていたことを話した。

「味覚が……それはつらかったですね」

寄り添ってくれるような笹井さんの声があまりに優しく、涙腺なみせだが緩みそうになる。

「何を食べても美味しくなくて。でも食べないと体がもたないとわかっていたので、食べてはいたんです。でも栄養になつていなかったのかもしれない。昨日、熱中症で倒れて入院しました。幸い一晩で退院できましたけど、もっとちゃんとした生活をしなきゃと思っていました」

「店長。彼女、泣きながら食べてたんですよ」

最初にレジをしてくれたあのきれいな店員さんが、横から話に入ってきた。

「え!? 見られていたんですか!?!」

壁を向いていたから、誰にも見られていないと思っていたのに。恥ずかしい。

「ええ。見えちゃいました。よっぽど美味しかったんだって、嬉しく思っていたの。味覚がないなんて事情があるとは思ってなかったけど」

肩をすくめた彼女は、掃除に戻る。

「どうして、急に味覚が戻ったんでしょうかねえ」

「眩つふやいた笹井さんが首を傾げる。
 どうしてなのか、私自身もわかっていない。

「差し支えなければ、どういう生活を送っていたのか、話してもらってもいいですか」

笹井さんも一緒に考えようとしてくれているのだと思い、私は頷いた。

「はい。それは構いません。ですけど、どの辺りから話せばいいんでしょうか？」

二十四歳までの学歴を口頭で伝えたところで、味覚を失った原因がわかるわけがない。

「これまでの人生に、一度でも味を感じなかったことはありませんか」

「なかったです。普通に、美味しく食べられていました」

「学生時代も？」

「はい。特別食べることが好きというほど食欲は強くないです。友人からスリムで羨ましいと言われることが多いですが、健康診断では痩せすぎと診断されていました。

でも味はちゃんと感じていました。甘いも辛いもしょっぱいも。美味しいと思っ
 て食べていました」

人と比べて食が細い自覚はあった。あまり量は食べられないタイプだ。

だからグルメバーガーを食べ切れるかなと心配していたのに、平らげた自分のお腹

にびっくりしたぐらいだった。

「夏前までは味覚がちゃんとあったんですね。その頃に、何かショックな出来事はなかったですか」

「思い当たりません。春に母が住む地域で比較的大きめの地震がありましたけど、母にも実家にも影響はなかったです」

「ふうん。突発的な事態というよりは、積み重ねが原因で、爆発したのがたまたまその時、ということかもしれませんね」

「それはどうということでしょうか？」

「就職してからのことを思い返してみましようか」

まるでカウンセリングでも受けているかのような笹井さんの言葉に誘導ゆうどうされるように、私は就職してからのつらかった日々を語った。

二章 最悪の職場環境

1. 給料泥棒と言われて

「○△保険の鈴原と申します。生活に変更などございませんか。ライフプランについてお困りごとや、お悩みごとなど、ご相談に乗らせてください」

『子供のお昼寝の時間に電話してこないで！ 迷惑なのよ！』

『あんた二十代じゃないの？ そんな未熟な人に相談したってねえ』

電話の向こうにいる人は、明らかに迷惑そうにしている。

私も実家にいる時、営業電話は迷惑だと思っていた。

大卒で就職し、自分が営業電話をかける側になって一年半。一向に慣れない。

保険の外交員からの営業電話だとわかった途端、無言で切られたり、暴言を吐かれたり。

優しく話を聞いてくれる人なんていない。

当たり前だ。私だつてわかっている。

申し訳ないと思いがらかけているのだから、相手に伝わってしまっているはずだ。

ああ、胃が痛い。

腹部を押さえて、大きな溜め息をつく。夏に入った頃から味がしなくなり、頻繁に胃が痛くなった。時折きりきりと締め上げられているような差し込みがある。食事はちゃんととっているから、空腹で痛いわけじゃない。

今日のお昼は何を食べたんだっけ。

ああ、サンドイッチだ。どんな味だったっけ。どんな具材がサンドされていたんだっけ。

「すずはらあ！」

怒鳴られて、はっとした。

お昼ご飯を思い出そうとしている姿がぼんやりしているように見えたのだろう。前方で、前田課長が眼鏡の奥から睨むように私を見ていた。

「暗い！ おまえ暗いんだ！ そんな声で話を聞いてくれる客がいるか！ うちと契約すれば安心を得られるんだと伝える努力をしろよ！」

私と課長の間には、電話をかけているスタッフが大勢いる。あちこちから話し声が

聞こえているのに、なぜか課長の怒鳴り声だけは鮮明に耳に届いた。

「ちよっと立って、練習してみろ」

うわー、サイアク。とはいえ、従わないわけにはいかない。

立ち上がって、社名と名前を名乗る。

「違う。もっと明るくだ」

つらい。恥ずかしい。顔から火が出そうだ。嫌な汗が背中を伝う。

「もっと明るく言えよ！」

何度も繰り返しさせられる。

苦痛を感じているのに、明るく言えるわけなんてない。

涙が零れそうになるのを見られたくなくて俯いた。

「女は泣けばいいと思ってるからいいよな。言っとくが、俺は指導をしてやってるんだ。パワハラじゃないからな」

課長の嫌な言い方に、誰が泣くもんかと唇を強く噛んだ。

「課長、それくらいでいいじゃないですか」

そこへ甘い華やかな声が割り込んだ。

振り返ると、女性社員が堂々とオフィスを歩いて来るのが視界に入った。

明るい茶髪をパーティー帰りかと思うほど華やかに結び上げ、豪華な薔薇を背負っ

ているかのような雰囲気がある。

営業部のエース、財前華緒さいぜんはなだった。

「きみは本当に優しいね。給料泥棒の肩を持つなんて」

「いけませんよ。鈴原さんも頑張っているんですから。彼女の分も、私が頑張ります。はい、こちら本日の契約書です」

財前さんが真つ赤なビジネスバッグから封筒を取り出して、課長に渡す。

「財前くんが部下で、俺は鼻が高いよ。きみにはノルマなんて必要ないからな」

課長の背後の壁には、営業部の個人名を書いたホワイトボードがある。契約が取れたら赤色のマグネットを貼り付けていく。

一人ひとりに課されている契約ノルマは月二件。

八月中旬——赤いマグネットが付いているスタップは少ない中、財前華緒だけは五個も付いていた。

「そんなことはありませんわ。目標は必要ですよ。二倍でも三倍でも、頑張りが目に見えるんですもの」

嫌味つたらしい言い方で部内を見渡し、私に視線を止めて、ふふつと唇の端を持ち上げて笑った。

全身が、かあつと熱くなった。明らかにバカにされている。

けれど営業成績の悪い私に、反論できるわけがない。悔しければ見返すしかないのに、この半年、まったく契約が取れていなかった。いや、この半年だけじゃない。入社してから、自分の力で取れた契約はない。親戚に頼み込み、友人に頼み込み、仕方がないな、ちょうど考えていたところなの、と契約してもらった。

何度もお願ひしすぎて、縁を切るよと怒らせてしまった親戚や友人もいる。縁を切ると警告してくれるだけまだ優しい。着信拒否された友人もいる。

財前華緒はいつだってやっつけて契約を取っているのだろう。

噂では親が大会社のお偉いさんで、社員を紹介してもらっているんだと聞いたことがあった。いいな。実家が太くて。

もちろん真実かは知らない。財前華緒の実力の可能性だってある。

凄いなと思うけれど、懂れたことはない。財前華緒は上司には良い顔をするけれど、下の人間は見下してくるから、嫌い。

「鈴原！ いつまでぼさつとしてる。おまえ人より劣っているんだから、一件でも多く電話をかけろ。明るくだぞ！」

課長にまた怒鳴られた。

私は唇を噛みながら座り、電話を手を取った。

2. 救急搬送されました

腕時計で時間を確認してから、黒いビジネスバッグを肩に掛け、立ち上がった。

昼休憩を返上して、外に出るぎりぎりまで営業電話をかけ続けたけど、すべて話を聞いてもらう前に切られた。

でもこの日は落ち込んでいなかった。営業でご自宅に訪問させていただくことになっただけからだ。

「課長、行ってきます」

「なんとしても取って来い」

「はい」

前田課長は私が営業に向かうのが嬉しいらしく、上機嫌で送り出してくれた。財前華緒とすれ違い、意味ありげな笑みを向けられる。

絶対に契約を取って来る、と胸の内で意気込んで、社を出た。

話を聞いてくれた松岡様は、五十代の主婦。二十五歳で独身の息子さんのために、手ごろな入院保険を探しているとのことだった。

『息子はまだ若いけど、いつ何が起るかわからないでしょう？ 備えるように勧めようと思って』と。

最初の訪問でお話をお聞きし、二回目の訪問でおすすめの入院保険のプランを提案してきた。三回目の今日は、検討のお返事を聞かせていただくことになっている。

松岡様と同世代の母がケガで入院したことにして、保険のお陰でお金の心配をせずに治療に専念できたと伝えた。

もちろん営業トーク。

母は出産以外で一度も入院をしたことがないほど元気いっぱいな人だ。

病気もケガもなく、幼馴染が経営するクリニックの受付で働いている。お盆とお正月には帰省したし、春に地震があつて電話をかけた時も元気だった。

お母さんごめん、と心で謝りながら、松岡様に嘘をついた。

『そうよね。病気にはなつて欲しくないけれど、ケガや事故に遭う可能性もあるものね。やっぱり入っていた方が安心よね』

松岡様は頷いてくれていた。契約してくれるといいな。

九月も半ばだというのに厳しい残暑で、真夏のような陽炎が立ち上る中でも、私は

意気揚々と駅に向かった。

三時間後、私は敗残兵となつて、社に戻る道をとほと歩いていた。

夕方にもかかわらず、強い陽射しが頭上に降り注ぐ。

拭いても拭いても汗が止まらず、体中がべとべとする。頭がぼーつとして、気持ちが悪い。改札を通つたあと、立ちくらみがして倒れそうになった。

昼食は抜いても、水分はとっていたんだけどな。

社に戻つて報告したら、何か食べよう。

あー、報告。気が重い。

戻らないわけにはいかないし、報告しないわけにもいかない。

だけど、契約は取れませんでした、なんて言ったら、課長は唾を飛ばしながら怒鳴り散らすんだろうな。

嫌だな。会社なんかなくなっちゃえばいいのに。胃が痛い。くらくらする。

頭の中で文句を言いながら、引きずるように重い足を踏み出して歩く。

自社ビルに辿り着いた。

自動ドアが開き、数歩中に入る。突如、体が重くなった。

あれ？ あれあれ？

自分の意識と逆らうように、体が傾いていき、言うことを聞かない。ああ、どうしよう、と思いつつも、どうすることもできなくて、倒れないようにしゃがんだものの、まだ体が重く、立ち上がれそうになかった。

このまま横になってしまいたいくらいきつかった。

いっそ意識を失った方が楽なのに、なぜだか意識は保つていようとしていて——
「どうかされました？」

遠くで誰かの声が聞こえる。

「救急車呼びましょうか？」

その人の困ったような声に返答をしようとしたけれど、声が出せない。息が徐々に荒くなっていく。

周囲のざわつきが耳に入る。

迷惑をかけている。わかっているのに、体も頭も動かない。

はあはあと、荒い息をするのがやっと。どうしようもできなかった。

「お名前言えますか？ 大丈夫ですからね」

やがてやって来た救急隊員からあれこれ質問される。

答えようとはするものの、思うように話せなくて。

ストレッチャーで運ばれた私は、初めて救急車に乗った。

病院に着き、途中までは意識があつたけれど、治療の途中で眠ってしまった。

目覚めた時、見慣れない模様の天井が見えて、一瞬戸惑った。

消毒薬の臭いがする。静かだけど、人の気配も感じた。

左腕に違和感があつて持ち上げると、点滴の針が刺さっているのが見えた。

そうだった。病院に運ばれたんだっと思ひ出した。

会社のロビーで倒れて、誰かが救急車を呼んでくれたんだ。

申し訳ないことをした。体調管理を怠おろそった私が悪い。

仕事はどうなったのだろう。私を知っている人が、営業部に連絡を入れてくれていると助かるんだけど。

電話をしないといけない、と考えていると、

「鈴原さん、気づかれましたか」

シャーツとカーテンが開いて、看護師さんが点滴のチェックをしてくれる。

「あの、電話をかけたいんですが」

「ここは使用禁止です。使用可能エリアが決まっているので、移動は点滴が終わってからにしてください」

そう教えられて、おとなしくしていた。

電話をかけられない理由ができたことに、正直なところほっとしていた。体のだるさやしんどさはなくなっていたけれど、前田課長と会話をする元気はなかったから。

点滴が終わった頃、やって来た医師に今日の行動や体調などを質問されて、一つひとつ記憶を辿りながら答えていった。

熱中症の処置を行ったことを聞かされ、水分と一緒に塩分も摂取する、食事や睡眠をしっかり取るよう注意を受けた。

退院は明日朝の診断を待ちましようと言われて、入院が確定した。

治療室のようなどころにいたらしく、その後病室に移送された。入院準備なんて当然してないから、パジャマをレンタルして着替えた。

電話しなきゃなと思いつつも横になると眠気に襲われ、そのまま寝てしまい、次に目覚めると、陽の光が室内を照らしていた。

3. すでに心は折れていた

体を起こす。毎朝感じる体のだるさや重さを感じない。

久しぶりにゆっくり眠ったんだと、心地よい目覚めで気がついた。いつも夜中に必ず目を覚ますし、変な夢でうなされることが多いのに。

もう少し眠りたいけれど、どうしようかなと悩んでいるうちに食事が運ばれて来て、朝食をとることにした。昨日、お医者さんから注意を受けたところだから、ちゃんと食べないと。

梅干しの載ったお粥かゆと、お味噌汁、お漬物、バナナ。

そういえば塩分をとるように言っていた。だから塩分多めの食事なのかなと思いつながら、口に運ぶ。

酸っぱそうな梅干しも、いつもと同じように味を感じない。まだ体が疲れているのだろうか。一晩寝たくらいで味覚が回復するわけない。いくらなんでも完全回復には早すぎると心で自嘲し、これからのことを思うと気が重くなった。

担当医の診察を受けて、退院の許可が下りた。

ほっとしたような、もう少しゆっくりしたいような、そんな気持ち片隅にあった。しかし、入院費が怖いし、怠け癖がついたらダメだと自分に言い聞かせ、替えて荷物をまとめた。

会計待ちの人がたくさん座って待っている。時間がかりそうだから、先に会社に

連絡をしておこうとスマホを取り出した。

外に出て電源を押すと、営業部からの電話が鬼のように入っていて、ぎよつとした。折り返すと、電話口に出たのは前田課長だった。

「鈴原です。連絡が遅くなりすみませんでした」

「ずはらあ！」

課長の怒声に思わずスマホを耳から離す。

それでも荒々しい声が聞こえてきて、胃がぎゅうと縮んだような気がした。

『おまえ連絡が遅いんだ！ 報・連・相！ 基本だろうが！』

それはわかつていているけれど、私にも事情がある。

スマホを耳に戻して、理由を説明する。

「すみません。昨日は熱中症で病院に運ばれて、そのまま入院になりました。病院はスマホが使える場所が限られていて、点滴で動けなくて……」

『そっちの事情なんぞ知らねえよ！ で、今どうなってんだよ』

「さっき退院許可が下りて、今は会計待ちです」

『だったらそのまま出社できるな。昨日の契約書持つてるんだろう。失くさないうちに出しろ』

「あ、あの……課長」

言いづらい。けれど言わないわけにはいかない。

「すみません。取れませんでした」

『ああん！』

「ひっ……」

さらに不機嫌になった声が恐ろしくて、スマホを落としそうになる。

『どういうことだ！ 取ってこいって言っただろうがよ！』

「その……ご本人様に別のところを検討しているからと、言われました」

『諦めて帰って来たのか！ 食らいつけよ！ よそに入る気があるんなら、うちにも可能性があるだろうがよ！』

一方的に怒られる。

もちろん食らいついた。どれだけ手厚い保障があるのか、もう一度説明をしたし、比較して欲しいと訴えた。けれど、検討先が知人で、何かあった時に知人の方が頼りやすいからと断られてしまうと、それ以上は言えなかった。

『だったら、戻って来て仕事しろ！』

「え？ 今からですか？」

『半人前が倒れる場合じゃないだろうが！』

「いや、でも、一応病み上がりで今日は休みたい……」

『サラリーマンやってたらみんなどこかしら調子悪いんだよ。それを押し仕事してんだろがよ！俺にだって調子悪いところぐらいあるんだよ！すぐに社しろ！根性叩き直してやる！』

ぶちっと回線が切れた。

怒っている前田課長の仕事や声が頭に浮かんでくる。

デスクをバァンと激しく叩き、厳しい言葉で叱責する。自分が怒られているんじゃないかも、思わず首をすくめてしまう。

あれを目の前で受けなければならぬのか。

もう一度入院させてもらおうかと真剣に考えてしまうほど、恐ろしい。

でも契約が取れなかった自分が悪いのだから、叱責されても仕方がない。

社しろと言われたのだから、行くしかない。

入院費の支払いを済ませ、とぼとぼと駅に向かった。

病院から一人暮らしの自宅までは一時間ほど。シャワーを浴びて、着替えをしたかったから、一度自宅に戻った。

社準備を整えて、また電車に乗る。自宅の最寄り駅から会社の最寄り駅までは、各駅停車で六駅。出勤時の超満員と比べるとまだけれど、それでもやや混雑していた。

車内の中ほどでつり革に掴まり、ぼんやりする。

降りる駅まであと三駅となった時、目の前の席に座っていた乗客が下車のために立ち上がった。病み上がりということもあり、座ることにした。

ふらつきや貧血を起こしそうなお状態ではないけれど、また救急搬送される事態になっではないけなから。

小さなトラブルが起きて、電車が止まらないかな。

電車が進み、停車し、また進むとつい考えてしまう。

どんどん気が重くなっていく。

行きたくない。降りたくない。

人がざつと降りて行く。

ああ、着いてしまった。降りなきゃ。

会社の最寄り駅はハブ駅であるため、ほとんどの乗客が入替わる。

私の周囲にいる乗客の大半が降りて行く。主婦らしき人。学生らしき人。営業職らしき人。

そして新たなお客が乗る。

扉が閉まる。出発する。

この路線は環状線じゃない。降りないと、どこまでも進んでしまう。ずっと。

終点がどこなのか。終点があるのかも知らない。次の駅に着く。引き返すには、降りないといけない。それなのに、足は、心は動かなかった。そっか、と気がついた。私の心は、ずっと前からすでに折れていたんだな、と。

4. 面接の結果

「パワハラだよね。それ」

またも掃除中の店員さんが声をかけてきた。

聞いていいのかわからず、あいまいにしてしていると、笹井さんが間に入ってくれた。

「パワハラだと決めつけてしまうには難しい問題ではあるけれど、きつい上司に当たってしまいましたね」

笹井さんの言葉に、やはりそうなんだ、と納得がいった。今まで疑問を持つことなく受け入れてきた。仕事だからそういうものだと思いついでいた。

「普通は違うんですか？」

「今はハラスメントが問題視されているから、気を付けている会社も多いはずですけど。まだそういう人も残っているでしょうね。問題視されて初めての行いがハラスメントだったと気がつくんだと思いますよ。それでも認めないタイプの人もいますでしょうね」

前田課長は、認めなさそうな気がする。そんな人と戦おうとは思わない。逃げるが勝ちだと思う。

「初めて入った会社で、つらい経験をしましたね。体に異変を感じた段階で、辞めようと思わなかったのですか」

笹井さんの質問に、私はすぐに「思わなかったです」と答えた。

「どうしてなのかわかりません。みんな頑張っているんだから、自分だけ逃げるなんて許されなれないと思い込んでいたように思います。それに——」

私は言葉を切った。入社理由を話す時は、心のコントロールが必要だった。

「中学生の時に、祖父が入院したんです。その際、いざという時に保険が頼りになると、ある人から聞いていて。それを信じていました」

子供だった私が純粹に信じ、就活で保険会社のエントリーシートの志望理由にそう記入した。面接でも話をした。

ある人物へ向けた、こみ上げてくる感情を抑えつけながら話す。

「でも自分には、営業職は向いていなかったようです。営業の電話をかける時、申し訳ないながらかけるようになっていました。たくさん怒られました。迷惑だと」お客さんのいない店内に、私の暗い言葉が落ちる。

ああ、また暗いと叱られてしまう。どうして私は、こんなにも暗いんだろう。

「頑張ったのに。ハズレ引いちゃったね、上司ガチャ」

店員さんの明るい口調が、私の闇を切り裂くかのように店内に響いた。

「こちら。松本さん」

笹井さんが苦笑しながら、氣遣いのない言い方をした彼女をたしなめる。

私はくすりと笑った。

二人のやりとりがおかしかった。

思わず笑みがこぼれてしまうほど明るいやり取りに、気持ちが楽になった。

くじ運が悪かっただけ、だったのかもしれない。

私はくじ運がある方じゃない。欲しい物ほど当たらず、嫌な物ほど当たってしまうから。松本さんが言葉が続けた。

「たまたま変な奴に当たっちゃっただけで、今後もそうだとは限らないよ。どうしたって合わない人はいる。でも合う人もいるし、自分に合う職場に巡り合う可能性

だってある。ここに来たのは、巡り合わせだったのかもしれないよね」

「はい」

私は素直に頷いた。

電車を降りられずに、流されるままにここに来た。古民家ベーカリー&カフェとまり木のパンを食べたのは、たまたまだと思っただけで、松本さんの言うように、巡り合わせなのかもしれない。

少なくとも私は救われた。パンと、楽しそうに働く人たちに。

「ここは空気がとても美味しくて。気持ちやすっとしたんです。解放された気がしました。味覚が戻ったのは、そのお陰もあるのかもしれませんが」

笹井さんがうんうんと頷く。

「仕事のプレッシャーが、味覚を奪っていたのかもしれませんがね。環境を変えるのは、鈴原さんにとって良いことかもしれません。ですけど、うちの雇用形態はアルバイトですよ。若いんだから、正社員か正社員登用のある会社を探したほうがいいと思うんです。家はこの辺りじゃないんでしょう?」

「通勤するには遠いので、引っ越しを考えています」

「ないでしょう。賃貸物件は」

「はい。なので、近隣の駅で探していました」

「そうなんだよね。そもそも人口が少ない上に、持ち家住まいが多いから、賃貸は需要がないんですよ。ここは」

笹井さんは周辺の物件情報に詳しいらしい。

働きたい気持ちはあっても、住居が定まらないと無理な話。

「じゃあ、うち来る？ あたし一人で住んでて、部屋余ってるよ」

「え？」

唐突な提案をしてくる松本さんの顔を、私はじつと見つめた。

あまりにもさらりと言われたので、どう返していいのかわからなかった。

「うち、部屋数だけはあるのよ。あなたの分の光熱費の支払いと、交代で家事をしてくれるって条件なら、家賃なんていらないわよ」

「あ、いえ、それは」

今さっき初めて会った人と同居なんて。同性とはいえ、さすがに二つ返事はできない。

「お店から近いよ。徒歩十分ぐらい。他人と暮らすのが苦手なら無理には言わないけど、近いと楽よ」

驚くほど、ぐいぐい勧めてくれる。松本さんからの提案に、私の心が揺れ始めた。

「松本さんのお住まいは、このと同じ古民家です。僕はこの二階が居住区なんだけ

ど、妻に先立たれて一人暮らしだから、広い家は持て余すんですよ。掃除も大変でね。松本さんも、そうだと思いますよ」

店長の言葉に、松本さんが頷いている。

プライベートな情報を聞かされて、あたふたと慌てる。

アットホームな雰囲気のお店だし、人も良さそうだけど、距離感には戸惑う。

「うち、おいでよ」

「ちょっと待ってください。その前に、採用してもらえたという事でいいのでしょうか？」

そもその前提として、採用されないと引越しもできない。

「なかなか人が来てくれなくて、正直困っていたんですよ。福留ふくとめさんが、ああ、白い帽子のあの人——」

笹井さんがもう一人の店員さんを見やる。

働きたいと申し出た時に取り次いでくれた店員さん。

「今月末で辞めちゃうんですね。開店時から働いてくれていたんだけど、ご主人が転勤になってね。それで急いで代わりを探していたんだけど、見つからなくて困っていたんです。アルバイトでも構わないのでしたら、来てもらえますか？」

急募と書かれていた理由を聞かされた。

今月末だなんて、もう半月ほどしかない。「はい！ ぜひ！ ありがとうございます。急いで退職手続きをします。家はもう少し探してみます。条件に合わなければ、しばらく松本さんのお宅に住み込みをさせてもらおうかと……」

採用してもらえないなら、一時的にお世話になろうかと考えを改める。松本さんを見ると、

「ウェルカム。沙耶さやって呼んで」

にっこりと笑いながら頷いた。

「これから退職だと、来てもらえるのは早くで一ヶ月後からになりますかね」

笹井さんの質問に、私は首を横に振った。

「あのオフィスに本社したくありません。無責任だと思いますが、代行業者に手続きを依頼します」

「代行業者？」

笹井さんが首を傾げた。

「本人の代わりに退職の手続きをしてくれる会社があるんです。依頼できる会社を探します」

説明をしても笹井さんはわからないのか、固まっている。

松本さんが言葉を添えてくれた。

「店長、知らないんですか？ 今は退職代行業者っていう会社があるんですよ。本人の代わりに手続きをしてくれるんですって。怖い上司に辞めますって言いにくいもんねえ。怒られるの、嫌だもん。すんなり認めてくれないかもしれないしね」

私が契約を取り、担当をしているお客様がいる。突然の退職に動揺なさるだろうけれど、必ず担当は付く。担当者変更のお知らせは、新担当がしてくれる。リモートで引き継ぎ処理をお願いし、出社せずに退職できるように、代行業者に間に入ってもらおう。

前田課長に、もう会わなくて済む。

それが叶いそうだとわかっただけで、心が軽くなった気がした。

「退職を代わりにしてくれる会社があるんですね。びっくりしました」

固まっていた状態から戻った笹井さんは、それまでと変わらない口調で言った。私はバレないように、ほっと息を吐いた。笹井さんは前田課長より年齢が上だろうから、そういうのはダメだと叱られるかも、と少しだけびくびくしていた。

「それじゃ、引越しがすんだら、連絡をください」

「わかりました。できるだけ早く、こちらに来ます」

私は力強く頷いた。